
ライス・ハザード? ~ アジア崩壊 ~

ロドリゲス 和司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライス・ハザード？～アジア崩壊～

【Nコード】

N2083K

【作者名】

ロドリゲスと司

【あらすじ】

前作より二週間、日本を出国した三年三組のメンバーは韓国に到達した。その頃、タイ、バンコクでは星野太希からRウイルスが拡散しアジア全土へ拡がろうとしていた。ついに「コメシス計画」が始動する。

プロローグ：不審船（前書き）

連載再開です。

ブローグ：不審船

「なんだ、あの船は」

プサン沖をパトロールしている韓国人の海上保安官が二隻の船を発見していた。

「おい、起きろ」

保安官はすぐに寝ている仲間達を起こす。

「なんだよ」

「おい、あの船なんだが」

船を指差して言った。船には日本語で何か文字が書かれていた。

「おかしいな、日本の船はもう無いはずなんだが」

この男の言うとおり今の日本には船どころか、人すら存在していない。ライス・ハザードという首謀者不明の事件により、人がほとんど死んでしまったのだ。なので、日本は地図上から消えたことになっていた。

「とりあえず本部に連絡を入れる」

本部に連絡を入れるために、リーダー格の男は操縦室へ向った。

「あー、こちらパトロール船三十四号、プサン沖にて不審漁船を発見。繰り返し…」

無線を入れ終わると男はすぐに甲板へ戻っていった。

「おい、何か動きはあったか」

「いえ、今のところはまだありません」

「隊長、もしかしたら遭難船ではありませんか」

「それはあるかもしれんな」

他の隊員も頷く。

「よし、ゆっくり接近していくぞ」

隊長はそう言って、船を怪しげな漁船に近づけていった。

「おい、一体どこの船だ」

甲板から声を呼びかけたが返事は返ってこない。

「隊長どうしますか」

「やむをえん、飛び移れ」

最初の隊員が不審船に飛び移ろうとした時、ドンドンと不審船の甲板に誰かが出てきた。まだ夜が明けていない。そのため、相手の人数までは把握できなかった。背丈からして中高生か。

「君達は何者だ」

隊長が問いかけるが返事は返ってこない。再び、隊長が問いかけようとしたとき、その誰かはいきなりこっちの船に飛び移ってきた。

「もう一度聞く。君達は何者だ」

こっちの問いかけなど全然聞いていない。いや、もしかしたら、言葉が通じていないのか。

その時、隊員の一人が殴られた。ぐわああとうめき声を上げる隊員。今のでアバラの二、三本はやられたか。今度は違う方向から銃声が聞こえてきた。次々と隊員が倒れていった。

「くそ、やつら戦い慣れていやがる」

いつのまにか隊長しか立っていないかった。そして、気が付くと目の前に敵が立っている。

「バゝ力」

一人の男が何のためらいも無く銃の引き金を引く。意味はわからなかったが、その言葉は完全にこっちを馬鹿にしていた。隊長は自分を撃った男の顔が確認できずに、甲板に倒れた。

「ふゝ終わった」

ちようど日の出だった。日本を出て二週間、ようやく韓国の近くまで来ることができた。朝日に照らされているのは三年三組のメンバーだった。

「おい、みんな見てみろ」

康太がそう言くと、三年三組のメンバーの目の前に広がるのは、広大な朝鮮半島だった。

「やったゝ」

みんな歓声の声を上げる。

帰る場所の無い三年三組のメンバーは歴史のあるアジアで新たな伝説を造り上げていく。

第1話：タイ、バンコクにて

三年三組が韓国に到達する二週間前、星野はバンコクで食い逃げを繰り返していた。米だけを頼み、食べ終われば逃亡する生活を繰り返していた。

「おい、おにぎり頭がいたぞ」

今日も警察に追われていた。

「くそ、行き止まりか」

足の遅い星野は見つかってから一分で路地裏の行き止まりに追い込まれた。

「あきらめな、おにぎり頭」

警察が三人近づいてくる。もう、逃げることはできない。

「ああ、どいつもこいつも」

星野は逆ギレをして、近づいてくる警察に襲い掛かった。

「どいつもこいつも」

星野は素手で警察を一人殴りつける。殴られた警察はすぐにその場に倒れた。残った二人が星野を取り押さえようと警棒を取り出した。星野は警棒を持っている手に蹴りを一発入れた。警棒は警察の手から放れ、宙を舞う。蹴られた警察は警棒を持っていた手を押さえ、うめき声をあげている。

「や、野郎ー」

もう一人の警察は警棒を振り上げた。星野は間髪入れずに警察の腹に肘撃ちをした。警察はその場に倒れた。

「もう一人いたな」

星野はそう言っ、うめき声をあげながら手を押さえる警察の後頭部を殴った。三人の警察を殺した星野の手には返り血が大量に付いていた。血で染まった自分の手をみて、うつすらと笑みを浮かべた。「これが今の俺の力か」

この時、星野の体はすこしづつ変化していた。その時、大通りから

声が聞こえた。

「久しぶり、星野君」

聞き覚えのある声だ。すぐに星野は大通りへ出た。そこにはスーツ姿の男が一人立っていた。顔にはお面がつけてあり、素顔は見えなかった。間違いない、研究所にいた男だ。

「何しに来た」

星野は荒い口調で言った。

「君の三角頭が見たくなっちゃって」

逆上し興奮している星野は、背後から近づいてくるもう一人の男に気が付かなかった。ゴツと鉄パイプで殴られた星野は気を失ってしまった。二人の研究員はトラックの荷台に星野を載せて、韓国のプサンヘトラックを走らせた。

第2話：拡散するRウイルス

三年三組のメンバーはプサンの街並みを歩いていて、街頭のテレビには自分達が乗ってきた船が映っていた。幸い、顔写真は写っていないので指名手配されることは無さそうだ。

「もうニュースになっているのか」

亮太がそう言った時、テロップの音が聞こえてきた。

「何て書いてあるんだ？」

尚人がこうちゃんに尋ねた。こうちゃんは以前、独学でハンゲルを勉強していた。と、言っても読み書きはできても会話はできないが。

「えっと、米人間出現かな」

「大陸にもRウイルス…か」

このニュースに三組のメンバーは黙るしかなかった。

「とりあえず、泊まる場所を探しに行くか」

和磨の提案により、一同は黙って和磨に付いて行った。

しばらく、歩き続けると、郊外に廃工場を見つけた。雨風くらいならしのげそうだ。

「あそこにしようぜ」

康太がそう言うと、一将、幹弘、純は駆け足で工場に入ってしまった。工場の中は結構広かった。泊まるには最適の場所だ。しかし、工場内には高校生くらいの不良がたむろしていた。不良はナイフを出し挑発をしてくる。

「うぜーんだよ」

純はマシンガンを取り出し、ドラム缶に向って威嚇射撃をした。流石の不良達も急いで工場から出て行った。その直後、工場の外から銃声が数回聞こえてきた。表に出ると、倒れている不良の財布をあると和司と尚人がいた。和司はスナイパーライフル、M24SWS、尚人はショットガン、モスバーグM590を持っていた。

「なかなか持っているな」

全ての財布を奪うと何事も無かったように和司と尚人は工場に入ってきた。

「相変わらず怖いな」

亮太が言った。

「そうかな？」

和司は笑いながら、お金を数え始めた。

「それより腹減った」

リヨスケが腹を押さえて言うと、周りも同じ仕草をした。

「盗みにでも行くか」

康太がそう言うと、各自バラバラに食料集めに行った。この時午後五時。日はすっかり落ちていた。誰もいなくなった無人の工場のラジオからニュースが流れ始めた。

「謎の人間、中国華南、ミャンマーで確認」

それから二時間後、それぞれ缶詰などを持ってきた一同は食事をし、眠りに就いた。

第3話：再会の星野

翌日、一番早く眼を覚ましたのは健斗だった。まだ、街の異変には気づいていない。もう日は昇り始めていたので、みんなを起こすことにした。起きたみんなは朝食をとり始めた。ラジオから英語でニュースが流れ、次に中国語、韓国語で流れた。康太は英語のニュースを聞き取り、紙にメモをした。

「おい康太ニユースでは何て言っていたんだ？」
健斗が康太に聞いた。

「え」と、謎のウイルス北京まで進行。国連はアジア全域を封鎖を決定した」と

康太はメモに書いたことを読み上げた。みんな驚きを隠せない。

「まじかよ」

日本から逃げてきてもRウイルスに…

「Rウイルスが北京まで来てるって事は、研究所にいたあの二人が関係してるってことだな」

「それだつたら星野もいるかもしれない」

「一旦プサンに戻るか」

話し合いの結果一同はプサンに戻ることにした。

「またあの距離を歩くのかよ」

リヨスケが文句を言う。しかし、文句を言っても何も変わらないため、一同はただ十数キロの道のりを歩き始めた。時計の針は午前十一時を指していた。このころ、Rウイルスの魔の手は北朝鮮にまで来ていた。

それから二時間、プサンまであと少しだった。ライスヒューマン達は韓国へ侵入していた。一同はこのことを知る好もなかった。今はただプサンを目指すだけだ。

そして午後二時二十分。プサンに到着した。近くの喫茶店で休憩しようとしたとき、突然、近くの射撃場から火の手が上がった。激し

く燃え上がる炎に大量の黒煙。一瞬にして辺りはパニックに陥った。多くの住民が逃げ惑う中、一同は黒煙から出てきた影を見続けた。そして影の正体が分かった途端目つきを変えた。

ライスヒューマンより遥かに大きく、二メートルはあるだろうと思われる体。あの人物と雰囲気重なる。

「星…野」

唇を噛みながら呟くと、後ろから二人の男が姿を現した。

「てめえら」

和磨が拳を構えた。仮面で顔は分からないが一目で誰か判断できた。研究所にいたあの二人。

すると一人の研究員が口を開いた。

「めでたくお友達と再会できたね」

「お友達ってことはそいつは星野か」

康太が尋ねるとすぐに答えは返ってきた。

「その通り。でもそいつにはコメシスっていうちゃんとした名前があるからね」

純と尚人が銃を構えた。

「僕達はこれでさよならだ」

そう言い残して二人は煙の中に消えていった。

第4話：決闘

「来るぞ！」

和司が叫んだ後コメシスは何のためらいもなくマシンガン撃ってきた。

「みんなバラける！」

康太が言うと、一同は二、三人のグループで固まりバラバラに別れた。

「死ねや」

一将、幹弘、高之は銃弾を次々と撃ち込む。しかし、コメシスの皮膚は銃弾をすべてはじき返す。銃弾が跳弾した。

「銃が効かねえんならこれならどうだ！」

和司と純が火炎瓶を投げた。辺り一面が火の海に包まれるがコメシスはびくともしない。

「クソ！」

コメシスの背後から和磨、こうちゃん、健斗がそれぞれ、メリケンサック、特殊警棒、トンファーで殴打した。コメシスに効いた様子は無く、コメシスの片手が持ち上がった。やばいと感じた康太と尚人はビルの入り口から援護射撃をする。銃弾は命中し一瞬コメシスの動きが止まる。そしてコメシスはグレネードランチャーを撃った。放たれたグレネードはビルの入り口の真上に命中し、無数に砕かれた瓦礫が康太と尚人を襲った。

「うわ〜」

叫び声と共に康太と尚人は瓦礫の下敷きになった。

「康太、尚人大丈夫か？」

二人に気を取られ、和磨、こうちゃん、健斗はコメシスの鉄拳をもるに食らってしまった。五メートルくらい飛ばされ三人はコンクリートに打ち付けられ気を失ってしまった。

コメシスは次の標的を探す為、辺りを見回した。その隙に物陰に隠

れていた秋田、亮太、リヨスケは一斉に襲い掛かり、至近距離から銃弾を浴びさせた。しかし、これもダメージを与えることはできなかった。

「嘘だろ？」

秋田が戦意を失ったように呟く。コメシスは腕の一振りですべて三人を吹き飛ばした。

それを見た純、一将、幹弘、高之は怒りを抑えることができなかった。一将にいたっては我を失っている。四人はコメシスに突っ込んだ。

コメシスは突っ込んでくる四人の足元にグレネードランチャーを発射した。突如、地面が砕け体勢を崩した。砂煙で周りがよく見えな

い。

「どこだ？クソどこだあいつは？」

パニックになる一将の目の前にコメシスがいた。まるで瞬間移動だ。コメシスは一将を殴り飛ばし、他の三人も鋭い回し蹴りで吹き飛ばした。純はブロック塀に叩きつけられ、幹弘、高之は遠くに飛ばされた。

次々にやられていく仲間達。和司はあの時の光景を鮮明に思い出していた。俊弥が死んだあの光景を。

「またあんな思いはしたくない」

懷からダイナマイトを取り出し、コメシスに向っていく。

「これでも食らえ」

導火線に火を点けたダイナマイトをコメシスの口の中に押し込んだ。

「くたばれ焼きおにぎり」

ものすごい爆発により和司は吹き飛ばされ、頭を打ち付けて気を失った。

煙が立ち込める中、コメシスはほぼ無傷で立っていた。顔が少し黒く焦げているだけだった。

コメシスの視界から敵は消えた。コメシスはどこかに立ち去っていた。

「素晴らしい」

遠くのビルから戦闘を見ていた研究員は軽く手を叩き、声を上げていた。

「攻撃、防御、スピードのどれをとっても完璧だ。これならばアジア制圧も時間の問題だ」

第5話：敗北の苦汁

「うつ」

康太は瓦礫の下で目を覚ました。近くには尚人がある。瓦礫と瓦礫の間にちようどいたたため、二人とも目立った外傷は無かった。

「尚人起きろ」

「ん〜ん」

尚人はまだ少し寝ぼけていた。康太は尚人を連れて瓦礫の下からの脱出を試みる。幸い、出口はすぐ近くにあったためすぐに脱出することができた。夜明けだった。コメシスと出会ったのは約午後三時半日以上気を失っていたのか。

「とりあえずみんなを」

尚人共にみんなを探しに行く。見つかったのは、和司、純、和磨、健斗、亮太、こうちゃんだけだった。あとの人は見つけることができなかった。生きていればいいんだが。

「早く手当てをしないと」

康太と尚人は手当てをしようとするものの、人手が足りなければ、医薬品も無い。

「少し街でも見に行くか」

「そうだね」

二人は街を見に行った。街は機能しておらず、静まり返っていた。建物のほとんどは破壊されており、住民は誰一人としていなかった。

「くそ、星野の野郎」

瓦礫を蹴り飛ばす。そういえば、昨日の戦闘で銃弾はほとんどなくなっていた。

「他のみんなはどこ行っただ」

悔しさが込みあがる。

「そろそろ戻るか」

尚人がそう言うと、康太は壊れた街並みを眺め静かに去って行った。

「イッテ」

全身の痛みで和磨は目を覚ました。手当てはしてあるようだ。しかし、包帯の巻き方が滅茶苦茶だ。ま、医学知識を少しかじった康太のことだ。止血する分には問題無いだろう。しかしあのクソおにぎり。まさか、星野にやられるとは思いもしなかった。次会ったらクロス。だが、倒れている人数が少なすぎる。もう少しいてもいいはずだ。

その時、和磨の背後から人の気配がした。

「だ、誰だ」

素手で構える。

「おい、和磨何やってんの」

「なんだ尚人か」

後ろにいたのが尚人だと分かると一気に体の力が抜けていった。

「痛っ」

全身に痛みが走る。

「ま、無理すんなよ和磨。怪我ひどいんだからさ」

尚人に言われて和磨はその場に座った。痛みがひどいのも無理はなかった。なんせ、五メートル吹き飛ばされた拳句、コンクリートに打ち付けられたのだから。

「まさか星野にやられるなんてな」

和磨と尚人は倒れている仲間に目を向けた。すると康太が仲間の手当てをしている事に気が付いた。

康太は手当てをしながら独り言のように呟いた。

「俺、力が無いことがこんなに悔しいことだなんて知らなかった」

その言葉は二人の胸に鋭く突き刺さった。二人は言葉を出すこともできず、ただぼうつとしていた。

「イテテ」

しばらくすると他の仲間も目を覚ました。全員怪我はひどかったが、とりあえず、残っている仲間達だけで作戦を立てることにした。

「ここにはもう誰も生きていないって」

「早く星野を探すか」

中々意見がまとまらない。

「とりあえず中国に行こうぜ」

尚人のこの一言で残ったメンバーは韓国を抜け出し、中国へ行くことになった。

「ここからなら港へ行つて船で向った方が早く着くぞ」

和司がパソコンで調べ、船で向うことになった一同は港へ行く為の車を探し始めた。

「この車でいいら」

純が見つけたのは小型バスだった。この大きさなら全員乗ることができる。キーもささったままで、ガソリンも満タンだ。だが、和磨の怪我也有り、運転する人がいなかった。

「おい、誰運転する？」

「俺パス」

「じゃあメンドイから俺も」

話し合いの結果、結局、和磨になった。

「俺ですか」

和磨がすごく嫌そうな顔をしながら運転席に乗り込んだ。痛みはまだ引いていない。怪我人に何させるんだよ。

この時、和司がパソコンの電源をつけ、ある音楽を流し始めた。

「こ、この曲は」

和磨の目が大きく開かれた。

「モえてきたぜ」

和磨は一五〇キロ近くのスピードで車を進める。安全運転で進めてくれ。そのおかげで数時間で港に着くことができた。

第6話：中国へ

「さっさと船を奪おうぜ」

和司がそう言うと同は船を捜し始める。すぐに船は見つかった。パトロール船だ。さらに、北京へ行くまでの地図も搭載されていた。日も暮れたころ、怪我がひどい健斗、こうちゃん、和磨と船酔いがひどい尚人と和司は寝ていた。この時船の操縦は亮太がしていた。康太と純は甲板に立っていた。

しばらくすると小型の船が近づいてきた。亮太は船を避けて進もうとすると、船はぶつかってきた。強い衝撃で船が激しく揺れる。

「な、何だ？」

純は揺れで尻餅をついた。すぐに純はぶつかってきた船の方を見た。ぶつかってきた船に乗っていたのは人間でなく、ライスヒューマンだった。なるほど、ぶつかってきた理由がわかった。

「死ネ」

純は船を飛び降り、ライスヒューマンが乗っている船に飛び乗った。襲い掛かってくるライスヒューマンの腹部を足払いで体勢を崩し、至近距離から銃弾を浴びせた。

「これで片付いたか」

一息ついたと思ったとき、船内からライスヒューマンが一体飛び出してきた。純はすぐにマシンガンでライスヒューマンの腹部を叩き付け甲板の隅に追いつめ、回し蹴りで海に落とした。ライスヒューマンをすべて片付けた純は船内を少し散策した。しかし、特に欲しいものは無かった。

「おーい純君」

自分達の船を見上げると康太が縄を降ろしていた。

「これに掴まって」

「ありがとう康太君」

純は軽く甲板を蹴って、縄をよじ登った。それを見た亮太は運転を

再開させた。

夜になっていたため、康太と純は寝室へ戻った。

「ぐわっ」

激しい揺れでベッドから床に叩きつけられた康太は目をさました。もう朝か。外へ出て景色を見るとすでに中国の港に到着していた。

「やっと着いたか」

朝日を浴びながら軽く伸びをすると、寝ていたメンバーも次々と起き始めてきた。

「とりあえず船降りるか」

康太がそう言うと同様は中国大陆に足を踏み入れていった。しかし、中国全土はライスヒューマンによって支配されていたことは康太達は知る由も無かった。

第7話：チエスト

しばらく歩いても人一人にすら出会わない。流石に一同も不安を感じ始めた。

「おい、中国も既にやられているんじゃないか」

亮太が言うと、みんな黙り込んでしまった。

そのまま歩き続けると気が付けば北京の中心部にまで辿り着いてしまった。

「あ、そうだ。これ渡しとくよ」

和司はバッグから何かを取り出した。そこには紙と銃弾が袋に入られていた。和司はそれを純、尚人、亮太に渡した。

「和司、何これ？」

純が和司に聞く。

「新兵器が開発できた。使い方は簡単だ。普通の銃弾と同じようにして使えばいい。効果は紙に書いてある」

三人は和司の話を黙って聞いた。

「テスト用として使ってくれ。不備があったら改良する」

そのまま、和司は話を続けようとしたときに、健斗は背中に嫌な気配をかんじた。何かと思って後ろを振り向くと信じられない光景があった。

「どうかしたけ」

尚人が様子のおかしい健斗に話しかけた。健斗が向いている方向を見ると言葉を失った。何十体、いや何百体のライスヒューマンがこっちに向って歩き出してきた。

「まじかよ」

前にいた和磨からも声が洩れた。

「囲まれたな」

こうちゃんがそう言うと全員背中を向け合い丸い円を作った。

「どうしますかねえ、康太隊長」

和司がふざけながら言う。

「じゃあとりあえず正面突破ってことで」

「異議無し」

一同がそう言うのと皆バラバラにライスヒューマンに向っていった。

「死ネ、死ネ、死ネ、死ネ」

そう言いながらショットガンとマシンガンを乱射する尚人と純は、高級料亭へ入って行き、その後を康太が追っていた。

「くそおにぎり、くそおにぎり」

和磨は叫びながらライスヒューマンを次々に殴り飛ばして行った。その後ろを亮太とこうちゃんが援護していった。

「チエスト」

和磨は廃病院の入り口に突っ込みそのまま奥へ入りこんで行った。

「ちよつと待てよ」

亮太とこうちゃんは急いで和磨を追った。

「ハッハッハ、消えろ、消えろ」

激しい爆発音と笑い声が戦場に響き渡る。

「危ねえよ」

健斗はそう言いながら次々に飛んでくる破片を避けながら、ライスヒューマンを倒していく。

「和司、あそこの中学校へ逃げ込むぞ」

「なんか中国の学校ってワクワクしねえ？」

ダイナマイトを片手に持ちながら和司は眼を輝かせながら答える。

「はいはい、そうだね」

健斗は軽く受け流し、二人は中学校の中に入っていた。

第8話：高級料亭の戦い

「おい康太君、これ見てよ」

純がそう言つと、康太はすぐ後ろを振り向いた。そこには回転テーブルの上で尚人が回っていた。

「なにやってんだよ」

多少呆れながら康太は奥の厨房を調べ始めた。すると、ゴソゴソと炊飯器の近くから物音が聞こえてきた。

「ねずみか」

康太は一発発砲すると、物音の正体がゆっくりと出てきた。

「やべえ」

康太はすぐに逃げ出した。物音の正体、それはライズドッグだった。急いで厨房抜け出すが中央広間にもライズドッグが数匹睨んできた。くそ、やるしかないか。康太は立て掛けてあった日本刀を手にし、尚人と純はショットガンとマシンガンを構えた。外から聞こえてきた爆発音によつて戦闘が開始された。

康太はテーブルクロスでライズドッグの視界を防いで刀を抜き出した。

「紫電一閃」

一瞬刀が光つたと思いきや、ライズドッグは真つ二つに切り裂かれた。模造品の刀じゃなかったのか。切れ味はいいな。

「悪いな。星野と闘うまでは負けるわけにはいかないんだ」

ライズドッグは残り二匹。直人と純は店の階段で立ち止まった。

「一旦ここで別れるぞ」

「分かった」

二人はここで別れ、尚人は二階、純は地下一階に降りていった。ライズドッグも二手に別れ、二人を追った。

「うわっ、寒っ」

地下一階に降りてきた純はあまりの寒さについ声が出てしまった。

大きい肉の塊や魚がぶら下げてある。冷蔵庫か。奥に進んでいくと後ろの階段から物音が聞こえてきた。

「そろそろ殺るか」

物陰に隠れライズドッグが近づいてくるのを待つ。

「来た来た」

マシンガンを構え、狙いを定め引き金を引く。しかし、寒さによる腕の震えで僅かに狙いがずれ、ライズドッグの頭にかすっただけだった。すぐにライズドッグはこっちに向ってきた。やばい、今ので場所がばれた。

「くそっ」

また銃を構え、引き金をひくがカチカチと音がするだけで反応は無い。おい、嘘だろ、まさか弾・・・切れ・・・既にライズドッグはすぐ手前まで来ている。

「まじかよ」

純は近くにある中華鍋を放り投げ、横に飛んだ。ライズドッグはそのまま中華鍋に突っ込む。しかし、傷はついておらず、中華鍋が大きくへこんだだけだった。この冷凍おにぎりが。

純はすぐ起き上がり、走り出した。

「なんかねえか」

ポケットに手をつ突っ込むと硬い感触が伝わった。

「まだこれがあったか」

純は和司からもらった銃弾をマシンガンに装填し、振り返り、マシンガンを構えた。

すぐにライズドッグは襲い掛かってきた。しかし、純は笑っていた。和司が書いてくれた説明書にはこう書いてあった。「おい純、核融合って知っているか。核同士の反応でできる熱はかなりの高熱になる。水爆にもそれが使われている。太陽もそうだ。重水素同士の反応は太陽の中心に近い温度になる。この銃弾はその太陽を一点に集中させたものだ」なるほどね。

「解凍してやるぜ」

純は強く引き金を引いた。

「ソーラーヒートショット」

純は反動により大きく後ろにのけぞった。反動が強すぎた。マシンガンから放たれた銃弾は衝撃により、重水素同士の反応が始まり、凍っていたライズドッグを溶かし、梅干を貫いた。

「あゝあ、とっておきたかったんだけどな。和司に結果を報告しないと」

ぶら下がっていた肉の塊や魚はこんがり焼けていた。そして純は冷蔵庫を後にした。

第9話：雑魚じゃない

「くそっ、さっさとどっか行け」

尚人は二階の広間に上がってもライズドッグが倒せずにはいた。こんな状況のとき、船の中で康太に言われたことが頭に響く。

「あゝウゼエ」

いつまで経っても攻撃するチャンスが来ない。お互い間合いを取っている。それだけではない。康太のあの声が蘇る。

「おい尚人、お前次コメシスと闘うときどっかに隠れている」

「はっなんで？」

「なんでっついても意味ねえから」

「それはどういうことだ」

「お前のショットガンは命中率は良いが弾が分散するため、他の銃弾より威力が低いんだ。そんなんじゃ俺達の足を引っ張るに決まってるんだろ雑魚」

尚人は三階へ続く階段を登り始めた。ライズドッグもそれを追うようにして階段を登る。

「もうあんなことは言わせない」

尚人は階段の途中で下がっていたシャンデリアに飛び移った。ライズドッグもそれを見るとこっちに飛び移ってきた。

「俺は…雑魚じゃない、強いんだ」

尚人の眼にはコメシスとライズドッグが重なって見えた。

「バーストブレード」

放たれた銃弾は普通の銃弾に見えた。だが、銃弾はライズドッグに刺さり、爆発が起こった。ライズドッグは力無く回転テーブルへと落ちていった。

シャンデリアから飛び降りた尚人はこのとき初めて康太がいた事に気が付いた。

「なかなかやるじゃん」

康太はそう言うで一階へ戻っていった。

この時尚人の心は喜びで震え上がっていた。康太が認めてくれたという事もあるが、まだまだ強くなれるという事がとてもうれしかった。

「もっと、強くなりたい」

その心が尚人を進化させた。

第10話：暴力

「あゝ邪魔くせゝ」

和磨は廃病院の中で暴れていた。かつてこの病院に入院していた患者や働いていた医者などがライスヒューマンになって襲っていた。和磨はライスヒューマンを殴り倒していくが数が多すぎてキリがない。体力に自信がある和磨も流石に息が切れてきた。和磨だけでなく亮太やこうちゃんもだ。

「三人だと逆に不利だ。ばらけよう」

亮太がそう言っていると和磨とこうちゃんは軽く返事をし、ライスヒューマンを掻き分けて進んでいった。

「後で屋上で」

亮太が大声で叫ぶと三人は完全にバラバラになった。

「どらあゝ」

和磨はライスヒューマンから逃げ切り、手術室に逃げ込んでいた。

「よし何もなし」

そう言った矢先、前方からメスが飛んできた。横に飛び回避したが右頬にかすり傷を負った。

「ふざけやがって」

和磨は視線を前に向けると全身にメスが刺さったライスヒューマンが立っていた。しかも次の攻撃の準備をしている。

「あまり俺様をなめるんじゃないやねえ」

一瞬でライスヒューマンの懐に詰め寄る。

「おい、世界で一番強い力を教えてやる。それは暴力なんだよ」
和磨は右腕を振り上げた。

「スクリューオタブロー」

ひねりが加えられたパンチはライスヒューマンの頭を粉々にした。

「きもいんだよこの米粒野郎」

和磨は手の汚れを払った。

そのころ亮太は別の手術室の前に立っていた。ライスヒューマンも、もうじき追いついてくるだろう。

覚悟を決めた亮太は扉を開け中に入ってしまった。中は薄暗く奥の方はよく見えなかった。床には無数のカルテが散らばっている。特に何も考えずに亮太は数枚のカルテを手に取った。ほとんどのカルテは中国表記だったが一枚だけ日本語表記のものがあり疑問を持った。ここは中国の病院だろ。その答えはカルテを読めばすぐに分かった。

「星野：太希」

そこには星野の顔写真と情報が詳しく書き記されていた。もしかして、星野はここで……

その時、初めて奥の椅子に誰かがいることに気がついた。

「誰だ」

返事はない。だが足音は近づいてくる。足音が大きくなったとき顔がはつきりと見えた。

「お前が星野を改造したのか」

怒りで声が震えていた。前に立っているのはサングラスをかけた男だった。サングラスの男は静かに口を開いた。

「普通のライスヒューマンじゃ物足りないと思ってね。何か気に障ったかな」

この男、淡々と言いやがって。亮太の中で怒りがこみ上げてくる。

「ふざけやがって」

亮太は腰にかけてあるベレッタM92を構えた。

「おおっと怖い、怖い。私はここで死ぬわけにはいかないんでね。代わりにこいつが相手をするよ」

サングラスの男が指をならすと扉の奥から一体のライスヒューマンが現れた。両手には血のついた鎖鎌を持っている。

「さあ殺れ」

男の命令によりライスヒューマンは機械のように亮太に向っていく。四方八方から鎖鎌が亮太を襲う。亮太はなんとか全ての鎌をかわしていた。

「よし、ここから反撃…」

反撃しようとしたが亮太はいつの間にか部屋の隅に追い込まれていた。

「やつべ…」

そんなことはお構いなしに鎖鎌は飛んでくる。亮太は壁を蹴ってライスヒューマンを飛び越え、空中で拳銃を二丁取り出し、ライスヒューマンの背中に撃った。

「やはり、効かねえか」

ライスヒューマンはこちらを向いてきた。

「お前達が強くなっているようにライスヒューマンも強くなっているのだよ。さつさと殺されてしまえ」

男の笑い声と鎖の金属音が部屋全体に響き渡る。

「もう充分楽しんだか」

ライスヒューマンの動きが止まった時、亮太が男に尋ねた。

「ハッ、何を言っているんだ殺戮シヨールはこれからだろ」

亮太は新たに銃弾を装填し、発砲した。男の次の言葉をかき消すように一発の銃弾が部屋にこだまし、銃弾はライスヒューマンの腹部に直撃した。

「フリーズショット」

「おいおい、一体どこを狙っているんだ。梅干を狙わなければいけないことを忘れたのか。もういい、さつさと殺してしまえ」

男が命令してもライスヒューマンは動かない。

「おい、何をしているさつさと殺してしまえ」

それでもライスヒューマンはピクリとも動かない。

「亮太、貴様何を撃った」

「フリーズショットは銃弾の先端に液体窒素が詰まっている。当たれば一瞬で氷漬けさ。さあ、次はお前だ」

亮太は銃口を男に向ける。

「さつきも言っただろ。死ぬわけにはいかないって」

男は懐から何かを取り出し、床に叩きつけた。その直後部屋中に白

い煙が充満した。

「くそつ、煙幕か」

扉が開く音が聞こえる。

「逃がすか」

素早く銃を構え、足音が聞こえる方向に向って引き金を引いたが銃弾は何かに当たった。煙幕が消え視界が晴れる頃には男の足音も聞こえなくなっていた。

「あれは何だ？」

男の居た場所に白いケースが落ちている。煙幕を出すときに落としたな。慎重にケースを開けると液体が入った細長いビンが四本入っている。これはもしかして・・・

「もしかして、抗ウイルス剤か」

亮太はケースごとリュックに詰め込んだ。

「早く屋上に行かなきゃ」

部屋の真ん中で倒れているライスヒューマンには目もくれずに、亮太は手術室を抜け出した。

第11話：疑問

「くそつ、面倒だな」

この時、こうちゃんはライスヒューマンを掻き分け屋上へ向う途中だった。両手には特殊警棒が二本握られている。

「こっから行った方が近いな」

こうちゃんは錆び付いている扉を蹴り破り、部屋の中に入った。

「ああ、ついていないな」

部屋の中にはライスヒューマンが一体待ち構えていた。かなり大きい大きさだ。

「時間がかかりそうだな」

すぐに警棒を構え、相手の出方を見る。ライスヒューマンは単調に突進してくる。だが、スピードはあまり速くない。こうちゃんは突進を避け、反撃の為警棒を振り上げた。その時、ライスヒューマンの腕が伸びてきた。こうちゃんは渾身の力を込めて、警棒で腕を叩きつけた。その時、こうちゃんに戦慄が走る。

「こいつ、どんだけ力が強いんだよ」

ライスヒューマンの腕は叩きつけられなかった。そして、ライスヒューマンはさらにスピードを上げて迫ってきた。

「やばい、やられる」

とっさに後ろに飛び、体勢を立て直す。相手は次の攻撃の準備に入っている。

「これだけは星野を殺す時までとっておきたかったんだよな」

こうちゃんは警棒についているボタンを押した。すると、電流が警棒に流れ始めた。火花が散っている。

「今度はこっちから行くぞ！」

一瞬でライスヒューマンの間合いに入った。

「フルコンボ」

ライスヒューマンに反撃の隙を与えないほどのハイスピードで全身

を殴打した。巨体が黒焦げになり、床に倒れこむ。

「死にはしない。お前は死ぬ価値すら持っていない」

こうちゃんはそう呟き、すぐに屋上に向かって行った。あの階段を登ればすぐ屋上だ。

「うわっ」

屋上には軍用のヘリコプターがあった。プロペラが回っているせいか、すごい風だ。

「一体誰が乗っているんだ」

その答えはすぐにわかった。ヘリから和磨と亮太が降りてきた。

「二人とも無事だったか」

「なんとかね。それより追っ手がくるから早く乗ってくれ」

和磨がそう言うと、こうちゃんはヘリに乗り込んだ。

「和磨、ヘリ操縦できるのか？」

「ハワイで親父に習った」

ヘリが離陸した直後、病院内のライスヒューマンが屋上に集まってきた。

「危ないところだった」

亮太は屋上に集まるライスヒューマンを見てあることを思い出した。

「そういえば、抗ウイルス剤らしき物が手に入ったんだよ」

「まじで」

和磨が驚きの声を発する。こうちゃんは既に亮太のリュックを調べていた。

「いつ手に入れたんだ」

和磨はヘリを操縦しながら軽く亮太に問い掛けた。

「サングラスの男が落としていったんだよ」

「あ、本当に入っている」

こうちゃんは白いケースから取り出している。

この時、亮太は変な違和感を覚えていた。いや、正確にはサングラスの男と病院で会ったあの時から。一体何故あの男に違和感を覚えたんだ。

そういえば、サングラスの男はあの時、

「亮太、貴様一体何を撃った」

「亮太、貴様…」

「亮太…」

そうだ、なんでだ。

「なんで俺の名前を知っているんだ」

「亮太何か言った？」

和磨の声を聞き、亮太は考えるのをやめた。

「別に何でもないよ」

「そうか」

和磨は再び操縦に集中し始めた。

第12話：亡き友

「おい、和司」

「何？」

和司と健斗は学校の中を探索していた。

「この学校つてさ麤玉中に似ているよね」

ふと健斗が疑問を口に出した。

そう言われてみると教室の配置や雰囲気が麤玉中にそっくりだった。しかし、大きさは三倍近くはあるだろう。

廊下を歩いていると教室から大きな物音が聞こえてきた。

「今の聞こえたか」

「聞こえたよ。ここは理科準備室かな」

二人は武器を構えた。

「どうする？入る？」

和司が健斗に尋ねる。健斗は笑って答えた。

「当たり前」

二人は一緒に教室に入り込んだ。和司は教室に入ると同時に、言葉では言い表すことができない嫌な空気を肌で感じ取った。新潟の洋館に入ったときと同じ感覚になっていた。だが教室の中には大量の薬品があるだけだった。

「気のせいかな」

とりあえず、二人で使えそうな薬品を探し始めた。塩酸、硫酸、水素、硝酸アンモニウムなどが手元を集まった。

ある程度、薬品が集まり教室を出ようとした時、二人の心に直接響くかのように、低く静かに奥の扉が開く音が聞こえた。

「何か来るぞ」

二人はすぐに武器を構えた。奥の扉からライスヒューマンとライスドッグが一体ずつ現れた。ライスドッグは異常に発達した牙を剥き出しにして突っ込んできた。健斗はトンファーで殴りライスドッグ

の首から上をえぐった。教室の中はライスドッグの血で染まっていた。

健斗はトンファーからばたばたと流れ落ちる血を見つめていた。その間にライスヒューマンは攻撃を仕掛けてきた。健斗は反撃の態勢に入ろうとしない。

パンツと一発の銃声が鳴り響くとライスヒューマンは床に崩れ落ちるようにして倒れこんだ。

その直後、二人は言葉を交わさなくても理解していた。奥の教室に何かがいることを。

様々な感情が自分の頭の中で交錯する中で二人は一步踏み出し、奥の教室へと進んでいった。

「うわっ、暗っ」

教室は光が入ってくるどころ全てにカーテンがしてありほぼ何も見えない暗闇の空間だった。二人は明かりを点けるため扉から離れた。すると、ガチャッと扉の鍵が閉まる音が後ろから聞こえてきた。

「ヤバイ、はめられた。」

健斗はすぐにリュックからライトを取り出し辺りを照らし始めた。

「おい、扉はまだあるぞ」

健斗が教室の奥のほうにある扉を見つけた。そして、もう一つある物を和司は見つけた。

「ちょっとライトを下げってくれ」

和司にそう言われると健斗は床の辺りを照らした。その時、二人は自分の目を疑った。

「人影か」

ポツリとそう呟く。健斗は影の中心に向かってライトを向けた。そして、本体の足の部分まで照らし出した。その時、二人は自分の目を疑った。

「浮いている」

だがそんなことは起こるはずも無い。和司は目を凝らし足元に注目した。

「健斗、よく見る。あれは壁に浮いているんじゃない。壁に張り付けられているんだ」

健斗は和司にそう言われ、足元に注目した。確かに何かによって張り付けられていた。

ライトを少しずつ上げてみていく。そのまま上半身を照らした。上半身は服を着ていない。いや、それよりも腹部にある異常な程の傷跡が気になった。あれは強引に引き裂かれ、強引に縫い閉じたように見えた。

「この学校の生徒か」

ついに二人は張り付けられている人の顔をライトで照らした。

「…」

二人は言葉を発することができなかった。顔の皮膚の部分が糸で縫い合わせられツギハギだらけだった。それでも、二人はその顔の人物をはつきり覚えていた。

ついに健斗がゆっくりと口を開いた。

「と…俊弥…」

二人は何が起こっているかわからなくなっていた。

「俊弥はあの時死んだはずだろ？」

健斗のその言葉で和司は目が覚めた。確かに俊弥は死んだが、死体を連れてくることは可能。それができるのはあいつらしい。和司が結論を導きだした時それは起こった。

「うわっ」

二人とも大声を上げてしまった。俊弥の腹部が異様なほど膨らみ始めた。まるで風船が膨らむようにどんどん大きくなっていく。そして腹部の傷跡から腕が一本生えてきた。いや、貫いたほうが正しいか。

そして、腹を強引に引き破り、生物が一匹誕生した。

イーターに似ているがもっと殺意めいたものを感じた。その生物は叫び声を上げる。

叫び声が終わると同時に二人は武器を構えた。

第13話：寄生する者

俊弥の腹の中から出てきた生物の姿はイーターに似ており、目があり、手足の関節が一個多かった。扉までの距離はおよそ一五メートル。戦闘を避けての脱出は不可能である。もう、二人には戦うしか道はなかった。生物の眼が大きく開いた。

「来るぞ！」

二人とも生物が攻撃してくるとわかっていたが、生物を見失ってしまった。

「速い」

教室という狭い空間に生物がどこにいるかわからない。イーターのように気配を消して動けるのか。和司はスナイパーライフルを持って辺りを見回す。

その時、健斗は白い糸が和司に近づいてくるのが見えた。

「和司、左に跳べ！」

叫んでいるかのような大声。和司はすぐに言われた通りに左へ跳んだ。その直後に大きな揺れが教室を襲った。

「な、何だ」

和司は周りを見た。和司より先に健斗が見つけた。

「あそこだ」

さっきまで和司がいた近くの場所の壁に生物がめり込んでいる。上半身全部がめり込んでいるせいか、なかなか抜けられないようだった。

「今の内に逃げるぞ」

二人は奥の扉から逃げ出した。生物は壁から抜け出し、すぐに二人の後を追った。

「何か弱点はないのか？」

「あれだけじゃ、わかんねえよ」

「それにあのスピードだもんな」

二人は生物が追ってきている事に気が付いていない。ピンポンと誰も居ないはずの校舎で突然校内放送が流れ始めた。

「廊下を走るのはやめましょう。それと後ろにいるパラサイトイーターに気を付けましょう」

二人はすぐに後ろを振り向いた。廊下のつきあたりにその生物はいた。

「へえ、パラサイトイーターって言うのか」

「そんなこと言っている場合か！」

健斗がやや荒れた口調で言う。

「大丈夫。あいつの弱点見つけたから」

軽く笑いながら和司は言った。

「本当なのか？」

「ああ」

「じゃあ、早く教室に」

健斗は近くの教室の扉を開ける。

「いや、廊下の方が戦いやすい」

和司は腰から何かを取り出した。

「おい、そんなんで大丈夫か」

和司が取り出したものは二本のナイフだった。

「後ろに下がってな」

ナイフを構えた和司が呟く。廊下の空気が張り詰められていく。パラサイトイーターと目が合った。その瞬間パラサイトイーターが視界から消えた。

「来るぞ！」

健斗の声が聞こえる。さっきあいつの弱点を探していたとき、襲われた時を思い出した。あいつが壁にめり込んでいた所の高さはちょうど俺ののだ辺りだった。もし、あいつがのどを狙うように本能にあるとしたら、その高さにナイフを構えていれば、自分から突っ込んでくるはずだ。

直後、和司の両腕に重たい衝撃が走る。

目の前には両腕にナイフが刺さっているパラサイトイーターがいた。
「へっ、これでもう何もできないだろ。」

うめき声を上げるパラサイトイーター。勝利を確信した和司。だがそこには落とし穴があった。

大きく口を開けるパラサイトイーター。しまった、これがあったか。長い舌が和司に伸びてくる。くそっ、油断した。目をつぶる。この時、和司は死を覚悟した。

だが、舌が自分の体に巻きついた感覚が無い。目を開けると舌が切れているパラサイトイーターがいる。

「早くナイフを放せ」

健斗の声で完全に目が覚めた。廊下には切り落とされた舌が落ちて
いる。

「サンキュー、健斗」

「ああ、こんなところでサヨナラはごめんだ。後は任せな」

舌を切られたパラサイトイーターは激痛でのだ打ち回っている。しかし、パラサイトイーターはすぐに反撃の姿勢をとった。

「ふざけた事しやがって。楽に死ねると思うなよ」

トンファーを構えなおす健斗。パラサイトイーターは腕に刺さっているナイフを強引に抜き、健斗に跳びかかった。健斗は跳びかかりを避けた。スピードは大分落ちているな。パラサイトイーターは腕を伸ばしてきた。

「この距離じゃ届かないだろ」

油断したその時だった。突然パラサイトイーターの腕が伸び始めたのだ。

「なんだ、これは？」

健斗は素早く反応して避けた。重傷には至らなかったものの、かすり傷を負った。くそっ、コイツ、関節を外して腕を伸ばしやがった。

「これで終わりだ」

健斗は二本のトンファーを振りかぶった。その時パラサイトイーターは二人の視界から消えた。まだあのスピードが出せるのか。健斗

が笑っているような表情が和司の瞳に映った。

「悪魔の裁き」

振り落とされたトンファーは寸分の狂いもなく、パラサイトイーターの頭に直撃し、梅干を砕いた。

「動きが速くて追えないのなら、待ち構えていればいい」

健斗はトンファーを腰に戻した。その時、廊下の窓からグラウンドを見ると、一機のヘリコプターが着陸しようとしていた。着陸したヘリの中から和磨や純などが降りてきた。

「和司、俺らも早く行こうぜ」

健斗はもう走り出している。この時、和司は一つのことを思い出した。

「悪い。先に行っていてくれ」

和司はそれ以上何も言わずに南校舎へ向った。

南校舎の二階は主に三年の教室として利用されていた。中国語でも漢字はある程度読めるためそれがわかった。一番端の教室には「三年三組」とあった。扉に手をやる。鍵がかかっていないのがすぐにわかった。

和司は一呼吸おいて扉を開けた。

第14話：運命の齒車

教室に一步足を踏み入れると、みんなで笑っていたあの頃を思い出す。

教室全体を見渡す。窓辺の机に腰をかけている一人の男。やはりいたか、サングラスの男。

サングラスの男はこちらの存在に気が付き、机から立ち上がり、こっちを向いた。

「やあ、久しぶり」

へらへら笑いながら話しかけてくる。あいつは自分の立場をわきまえているのか。

「無人の校舎から校内放送が聞こえてきた時、ここにいるってわかったぜ」

「相変わらず、勘の鋭いガキだ。イライラするね」

一瞬で男の周りの空気が重苦しいものになった。

「どうした、何か聞きたそうだな？」

もう既にサングラスの男のペースになっている。

「星野、いやコメシスは今どこにいる。それとお前は一体何者なんだ」

サングラスの男が軽く息を吐く。

「まず一つ目の質問から答えよう。コメシスは今、香港で暴れている。あと、二、三時間もあれば街を完全に破壊するだろう。次の質問は見た方が早いだろう」

そう言うと、サングラスの男は自分の髪を引っ張り始めた。

「カツラをしていたのか、気が付かなかった」

そして、サングラスを外した。その素顔は見覚えがある顔だった。

「お前達はちよつと変装しただけで俺の顔を忘れてしまうのか」

言葉が出てこない。まさか、こんな身近なところにいた奴だったなんて。完全に和司の頭はパニックに陥っていた。

「そろそろ、時間だ」

サングラスの男は教室の窓を開けて、ハングライダーで飛びたって行った。そして、別れ際に一言言い残した。

「俺の正体を仲間に言いたきゃ言ってもいい。それはお前の好きにしな」

和司はその場に立ち尽くしてしまった。言っても言わなくても、もう運命の齒車は動き始めてしまった。それも急激な速さで。

「おい、和司」

急に後ろから声が聞こえた。振り向くと健斗が遅くなった自分呼びに来ていた。

「早くしろよ。もうみんな乗っているぞ」

「ああ、悪い」

二人でグラウンドに向う。この時も和司は考えていた。あの男の正体を言うか言わないか。

グラウンドに着くと、もうみんなへりに乗り込んでいた。

「遅いぞ、早くしろ」

みんなに言われ、駆け足で乗り込む。

「和磨、出発してくれ」

康太がそう言くと、和磨は操縦を始めた。

「ところでコメシスってどこにいの？」

尚人がみんなに聞く。みんな、そういえばといった感じた。

「コメシスは香港にいる」

和司が軽く答える。

「え、なんで知ってんの？」

「まあ、いろいろとあって」

和司は結局、男の正体をみんなに言わなかった。

グラウンドから出発してから数十分、香港付近の街から黒い煙が発生しているのが見えた。

「そろそろか」

純が武器を取り出しながら、そう呟く。

「和磨、煙の所へ向ってくれ」

康太がそう言うと、みんなの会話が止まる。

「こちらでいいか」

和磨は着陸できる場所を見つけると、すぐに着陸を始めた。

この時、亮太は何か嫌な予感がした。

「コメシス…」

まずい、脱出しないと全員やられる。

「みんな、脱出の準備をして！」

亮太は急に叫んだ。

「え、何で？」

「いいから、早く！コメシスがすぐ近くにいる！グレネードランチャーでヘリごと落とすつもりだ！」

一同はすぐに脱出の準備を始め、パラシュートを装着し始めた。しかし、パラシュートが一つ足りなかった。

「パラシュートが一つ足りない！」

全員がパニックになる。しかし、一人だけやけに落ち着いていた。

「俺がここに残ろう。みんなすぐに脱出しろ」

和磨は静かに言った。

「そんなことできるわけないだろ！」

康太が叫んだ。その時、コメシスはグレネードランチャーをヘリの方向に向けていた。

「誰かが一人残らなければならぬ。だったら俺がここに残る。ここで俺が操縦をやめれば全員脱出する前に死ぬぞ」

一同が涙を吞んだ。次々とヘリから脱出し始めたが、康太は脱出できずにいた。

「いいから、行け馬鹿野郎！」

和磨は操縦席を離れ、康太をヘリから突き落とした。それと同時にヘリに向けて発射されたロケットランチャーが向ってきていた。操縦を一時的にやめたためヘリのバランスが大きく崩れる。そして、ロケットランチャーはヘリに命中し、廃墟と化した香港の地に墜落

して
いつ
た。

第15話：リベンジ

一同はパラシュートで無事に着地することができた。乗っていたヘリはビルに衝突し燃え上がっていた。全員が涙をこらえていた。

「くそつ、コメシス許さねえ」

康太が呟く。その時、柱の影から一人の男が現れた。

「おやおや、またお友達を一人失ったのかい」

サングラスの男だ。しかし、もう一人は見当たらなかった。

「おい、もう一人の男はどこ行った」

康太が怒りと悲しみをこらえながら聞いた。

「ああ、あいつは邪魔だったから殺したんだよ。限りある資源を大切にする為だね。まったく、人が死ぬときはいつ見てもいいもんだ」
こいつ狂っていやがる。

「早く星野を救ってみろ」

サングラスの男はそう言い残して煙の中に姿を消した。

「そうだ、コメシスは」

その時、コメシスは俺達の事を無視し、街を破壊していた。

「またシカトかあの野郎」

尚人がいらついた口調でそう言った。

「挨拶代わりだ」

こうちゃんが手榴弾をコメシスに向って投げた。激しい爆発と煙がコメシスを包み込む。

だが、煙の中から、何もなかったかのようにコメシスが立っている。だが、康太があることを見つけた。

「みんな、頭は狙うな」

康太の意外な一言にみんな驚いた。

「なんでだよ、頭を狙わないと殺せないだろ」

健斗がそう言うと、康太は説明し始めた。

「コメシスをよく見る。頭部にはほとんど傷が無いが、手や足には

軽い火傷がある。手や足を攻撃すれば、こっちにはあれがある」

「ああ、あれか」

純がそう答えると、全員武器を構えた。コメシスも戦闘に入った。

「行くぞ！」

全員でコメシスに向って走り出した。

「始まったか」

近くのビルの屋上からサングラスの男は眺めていた。

「来るぞ」

コメシスはマシンガン撃ってきた。だが、全員弾幕をかわした。

「同じ手を二度も食らうか」

反撃の隙を狙うが相手もそう簡単に隙を見せない。五感で感じる、攻撃のチャンス。全員コメシスの攻撃を避けながら、攻撃を仕掛けるチャンスをつかがう。亮太は右手に持ったベレッタM92をコメシスの右足に向けて発砲した。銃弾は命中し、コメシスは一瞬だけバランスを崩した。

「フリーズショット」

今度は左手に持ったベレッタM92をコメシスの右足にむけて撃った。放たれた銃弾は、コメシスの右足に命中し氷漬けにしていく。

「今だ！」

こうちゃんはコメシスの背後に一瞬で詰め寄った。

「食らつとけ星野、フルコンボ」

特殊警棒の殴打はコメシス本体ではなく、マシンガンとグレネードランチャーを破壊した。こうちゃんはすぐにコメシスの背後から離れた。コメシスは、自分の右足を殴った。氷漬けにされていた足がうごくようになった。武器を何も持たないコメシスは武器を調達するために大きな武道場へ入って行った。

「追うぞ！」

康太はすぐに武道場へ入り、コメシスを追い詰める。コメシスは立て掛けてある刀を二本持った。康太は自分の日本刀を抜き始めた。

第16話：最終局面

「紫電一閃」

康太はコメシスを斬りつけた。コメシスは刀を二本を交差させるようにして攻撃を防いだ。

「剣術にも精通しているのか」

康太はコメシスに詰め寄り、攻撃する。コメシスも刀を二本使い、攻撃した。ぶつかりあい、互いに一步も退かなかった。コメシスは二本の刀を巧みに使い、康太を押し始めた。康太は一本の刀のみを使い太刀筋を受け流す。

「まずいな。このままじゃやられる」

康太は一旦退き、壁を蹴りコメシスの背後に回った。がら空きとなったコメシスの背中を斬りつけるが、かすり傷一つ負わない。やはり、手足でないと無理か。コメシスはすぐに右腕を振り、背後にいる康太を斬りつけようとした。康太はしゃがんで攻撃をかわし、コメシスの膝の裏側を蹴った。コメシスのバランスが大きく崩れる。

康太は急いでコメシスから離れ間合いを取った。

「これで終わりだ」

コメシスがこっちに向って走ってくる。康太は深呼吸をして刀を構えた。

「森羅万象」

辺りが静かになった。その時、コメシスが持っていた二本の刀の刃が砕けた。コメシスは使い物にならなくなった刀を放り捨て、雄たけびをあげている。

「こうちゃん！」

康太はこうちゃんを呼んだ。こうちゃんはすぐに康太の下へ駆けつけた。そして、康太はコメシスの右腕を掴み、こうちゃんはコメシスの左腕を掴んでコメシスを投げた。コメシスは宙を舞い、武道場の壁を突き破り、外へ投げ出された。

武道場の外には純が待ち構えていた。

「まだ終わりじゃないぜ、ソーラーヒートショット」

放たれた銃弾はコメシスの右足に風穴を開けた。右足は完全に崩れ落ち、膝をついた。コメシスはそのから力任せに腕を振る。

「危ね」

純は後ろに跳び、寸前のところで回避した。

「純、下がれ」

和司は液体の入った瓶をコメシスに向って投げ、それを尚人が銃弾で打ち抜いた。瓶の中に入っていた液体がコメシスの右腕に降りかった。

「その液体はガソリンだ。頼むぜ尚人」

「任せろ、バーストブレット」

激しい爆発と同時に炎が右腕を包む。必死に炎を消そうとするコメシス。

「もらうぜ、その右腕。悪魔の裁き」

コメシスの真上から現れた健斗。トンファーを振り落とし、肘から下の部分を叩き落とした。コメシスの周りには全員集まっている。

「亮太、やってくれ。」

亮太は康太にそう言われると、あるものを取り出した。抗ウイルス剤だ。

コメシスに抗ウイルス剤を打ち込む。

「これで終わった」

誰かがそう呟いた。今までの事が走馬灯のように蘇ってくる。

その時、和司と康太はサングラスの男を見つける。男の顔は笑っていた。

もしかして、これで終わりじゃないのか。

第17話：まだ終わらない

急にコメシスの体が発光し始めた。

「な、なんだ？」

あまりの眩しさに全員が目を開けてしまった。

発光が納まり、全員が目を開ける。そこにはコメシスはおらず、小さいライスヒューマンが立っていた。ちょうど星野ぐらいの大きさだった。

「ハハハッ」

全員が笑い出した。

「いつもの星野じゃねーか」

尚人がそう言うのと、さらに笑った。

「だけど目も口も無いぞ」

健斗の発言により全員の笑いが止まる。確かに普通のライスヒューマンとは違う。

「へボすぎてライスヒューマンにすらなれなかったんじゃねえの？」

尚人がそう言うのと再び笑い始めた。コメシスを倒した事に全員がうかれていた。

「ハッハッハッ」

それを見て笑っている男がいる。サングラスの男だ。急にみんなの笑いが止まる。男は呟いた。

「君達にはこの言葉を送ろう。油断大敵と」

この言葉は康太達には届かなかった。まるで星野がいないと思うくらい笑い続けていた。

「もうだめだ。笑い死ぬ」

康太はそのまま地面に仰向けに寝転んだ。

そしてその時を待っていたかのように星野が動き出した。

「うわっ、何しやがる」

星野は康太の両腕を掴み、押さえつけた。

「口もねえのにそんなことしても無駄だぞ」

純がそう言った直後、場の空気が凍りついた。星野の頭が真つ二つに割れ始め、康太の顔に近づいた。

「やめろ！」

必死に抵抗するにも星野の力は強く、抜け出すことができない。

それを見ているこうちゃん達はあまりの驚きで動くことすらできない。サングラスの男もそれを見ていた。

「あゝあ、だから言ったのに」

そう言い、静かに笑い出した。康太と星野の顔の距離が十センチ程になる。

「俊弥、俺もそつちに行くよ。」

康太は死を覚悟した。今までの光景が頭に浮かぶ。もう少し長生きしたかったよ。

第18話：復活

星野が康太の顔に食らいつこうとした時、ビルの影から誰かが現れた。

「オワタ」

又ンチャクが星野の顔をえぐり、星野は吹き飛んだ。

「誰だ！」

全員がその誰かの方を見た。手には又ンチャク、チャイナドレスに身をまとい、そして背中には「萌」の一字が。

「無事だったのか」

和司がその声を洩らす。そこには死んだと思われていた和磨の姿があった。あの事故からどうやって生き延びたんだ。

「ったく、心配させやがって」

こうちゃんが言った。それにしてもその服装はどうした。

「悪い、ちよつと服が無くてね」

和磨はそう言い、星野を睨みつけた。

「星野、調子こきやがって。中国四千年の歴史を受けてみる！」

和磨は星野へ向って行った。この時、和磨を除く全員が同じ事を思っていた。

「和磨、お前日本人だろ」

星野はすぐに起き上がり、和磨に向って行った。

「食らえ！」

和磨は巧みに又ンチャクを使い、星野の体を殴打した。星野は又ンチャクの殴打に持ちこたえ、和磨の体に数発拳を打ち込んだ。和磨は又ンチャクで星野の拳を受け流した。しかし、受け流しきれずに一発、左胸に拳を受けてしまった。

「なかなか強いな」

左胸を押さえながら呟く。結構効いたな。

「和磨がやられたら終わりだな」

亮太はそう言うと、瓦礫の上に座り始めた。もう、こっちは和磨しか対抗できる相手がいない。

「オラァ」

和磨は又ンチャクを星野のあごの下に決めた。一瞬隙ができる。間髪入れずに星野の腹に蹴りを入れた。

「ハアハア」

だんだん和磨の息切れが激しくなってくる。星野は再び起き上がる。この時、康太は重要なことに気が付く。

「このままじゃ、負けるぞ」

「えっ」

全員驚きの声を上げる。

「和磨の体力には限界がある。だが、星野を試してみる。息切れ一つしていない」

人間とライスヒューマンの差がここにきて、はっきりと出始めた。

「和磨、早く決めろ！」

尚人が声を上げる。

「分かっている！食らえ、和磨乱舞」

和磨は倍近いスピードで又ンチャクを振り回した。

「オタオタオタオタタタ」

又ンチャクの乱舞が全て命中し、星野は近くにあったビルの一階にまで吹き飛ばされた。

「頼む、そろそろダウンしてくれ。」

そんな和磨の期待を裏切るようにして、舞い上がる煙の中から星野は現れた。そして、一瞬で和磨に詰め寄り、和磨の右手にある又ンチャクを弾き飛ばした。

「しまった」

そのまま和磨にボディブローを入れる。

「グアー」

倒れようとする和磨に回し蹴りを入れ、さらにかかと落としも命中させた。

「ヤバイ。和磨を助けるぞ」

全員が星野を止めに向かうが、進化した星野は誰にも止められなかった。

最初コメシスと戦った時の圧倒的な力の差がそこにはあった。

第19話：衝撃

星野にやられた和磨は立ち上がった。

「俺は何のために戦場に立っている？まだ右の拳があるだろ！」

だが隙を作らないと当てることができない。ボロボロになった和磨に隙を作ることが出来るほどの余裕は無かった。その時、瀕死になつていた仲間も立ち上がった。

「和磨、五秒ならなんとかいけるぞ」

「そんだけあれば、充分だ」

星野にも弱点があることを全員が気が付いていた。攻撃直後の僅かな時間。そこを突くしかない。亮太は最後の銃弾を星野の足元目掛けて発砲し、純もマシンガンで星野の足元目掛けて撃った。星野の狙いが和磨から亮太と純に変わった。星野は亮太にリアットを食らわせ、純の腹目掛けて蹴りを入れた。

星野が純の腹に蹴りを入れ終わったとき、こうちゃんと健斗は星野の背後に回り、攻撃を仕掛けた。星野は攻撃される前に後ろを振り返し、跳びかかってきたこうちゃんと健斗を叩き落とした。その直後に康太は日本刀で星野の左腕に斬りかかり、和司は短刀で右腕に斬りかかった。しかし、二人の攻撃は弾かれ、すぐに星野の反撃を食らった。最後に残った尚人は散弾を星野の頭に目掛けて撃った。

星野は素早い動きで散弾をかわし、尚人の背後に回り、拳を振り上げた。拳は尚人の後頭部に命中し、尚人は地面に叩きつけられた。その時、和磨が星野の背後に回った。

「みんな恩に着る。食らえ究極の右ストレート」

和磨は右腕を振り上げ、構えた。

「萌え萌え真拳奥義・一枚ガラス割り正拳！」

渾身の一撃は星野の頭の中心をえぐり、梅干を破壊した。

みんな力尽きており、和磨もその場に倒れこんだ。気が付けば、一番星が出ている。

全員が起き上がろうとした時、あの男が俺達の前に姿を現した。サングラスの男だ。

「まさかここまでやるとは。素晴らしいの一言に尽きる」

男はそう言い、拍手をした。

「何の用だ」

こうちゃんが鋭い目つきをしながら聞いた。和司だけは何しにきたか検討がついていた。

「そろそろ正体を明かそうと思ってね」

男はまずサングラスを外し、眼鏡に付け替え、カツラを取った。

「お、お前は」

全員声が震えている。驚きを隠しきれていない。

三年三組になってから毎日見ている顔。三年三組の担任だ。全員が声をそろえてその名を呼んだ。

「と、得……」

第19話：衝撃（後書き）

第二部終了です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2083k/>

ライス・ハザード?～アジア崩壊～

2010年10月11日15時29分発行